

長岡京跡右京第 1034 次調査

現地説明会資料

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

遺 跡 名 長岡京跡右京五条三坊三町 開田城ノ内遺跡

所 在 地 長岡京市長岡二丁目 421-1、422-1

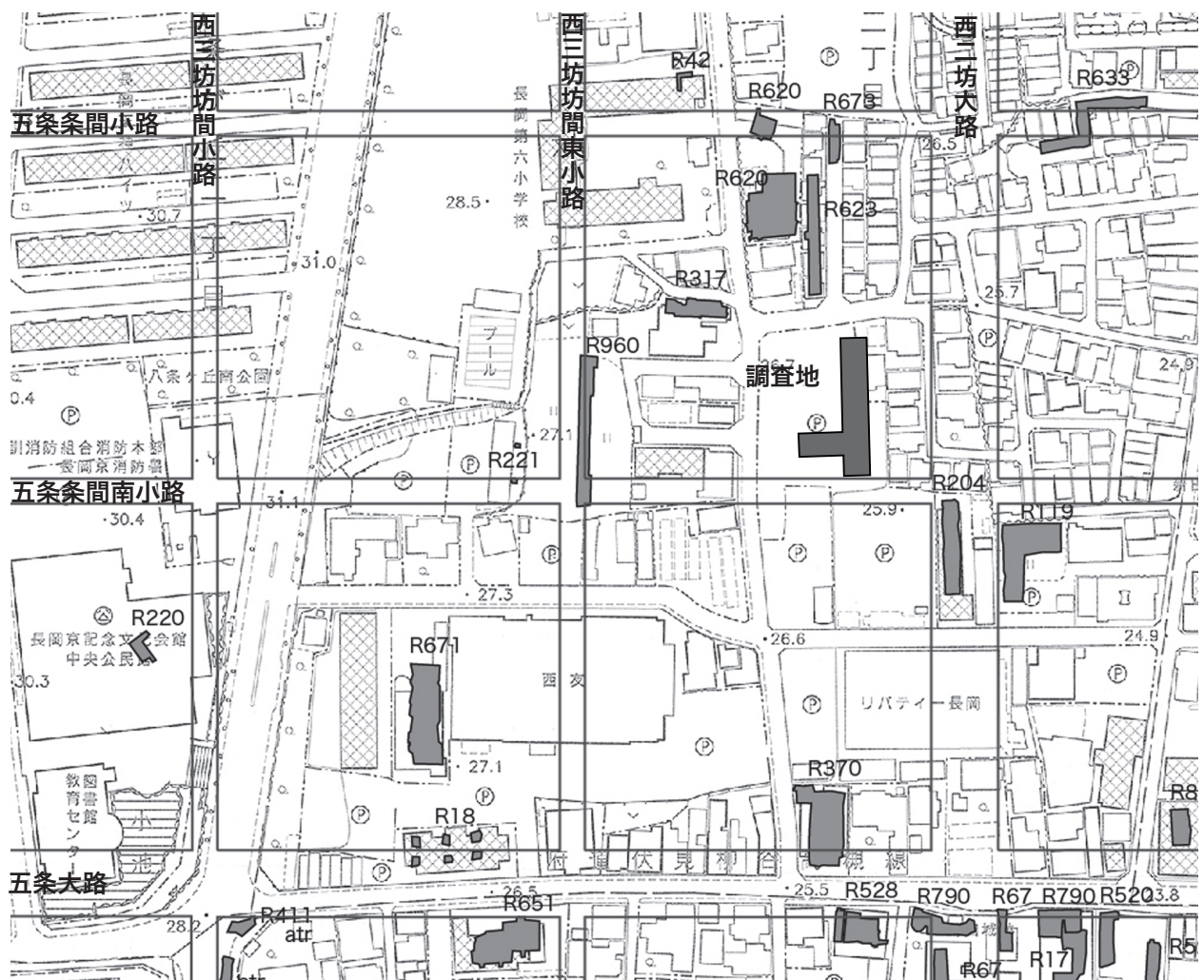
調査期間 2011 年 11 月 14 日～2012 年 2 月 14 日（予定）

調査面積 594 m²（予定）

はじめに

今回の調査は陸備建設株式会社によるマンション建設工事に伴っておこなわれたものです。

調査地では中世から近代の水田耕作に伴う溝群、長岡京期の溝、掘立柱建物、土坑など、奈良時代の掘立柱建物、溝、土坑、古墳時代後期の竪穴住居などが確認されています。まだ調査途中の段階ですが、ここでは長岡京期の成果について概説します。



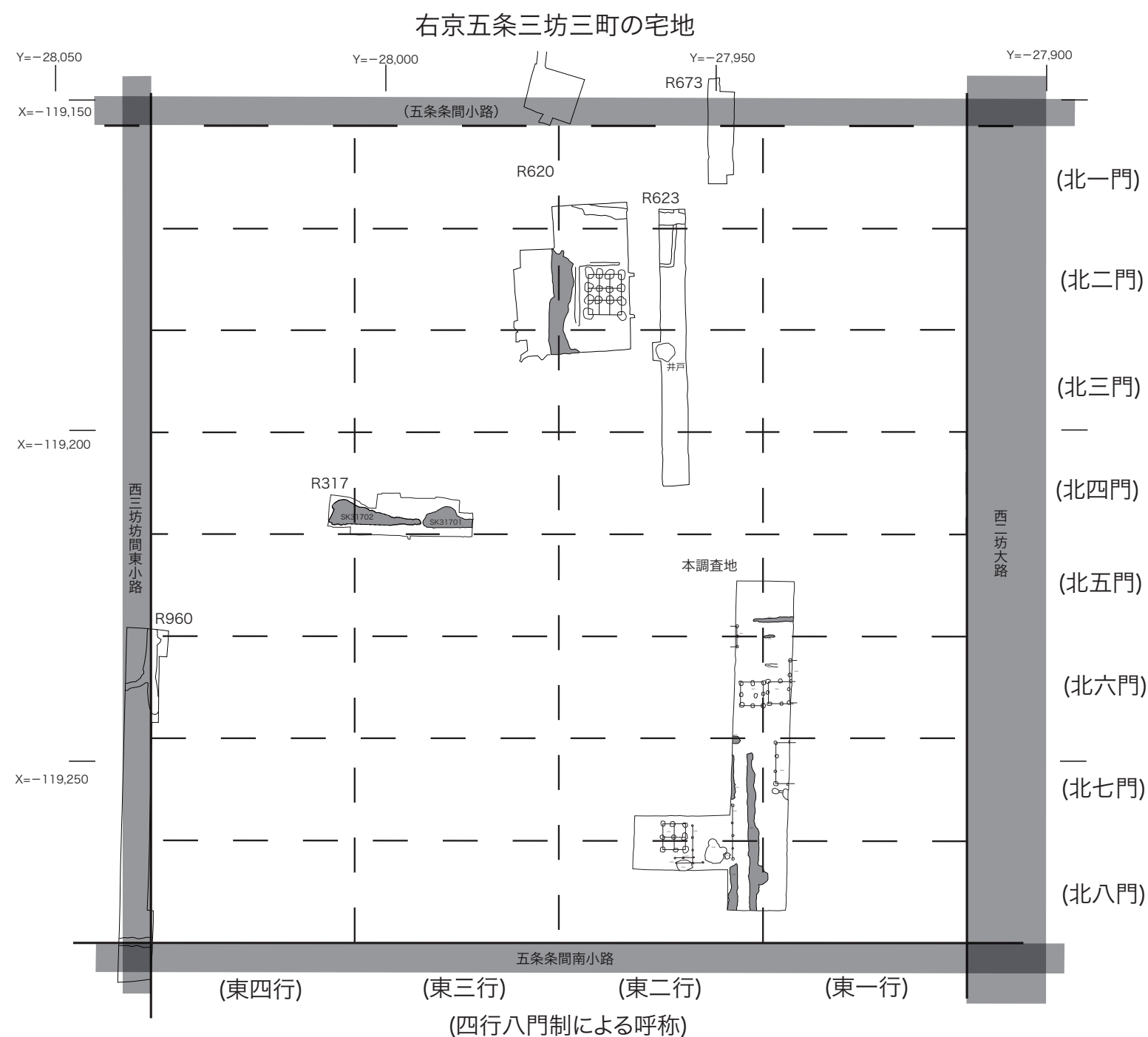
1 図 周辺調査地／条坊復元図と調査地の位置

長岡京期の遺構配置

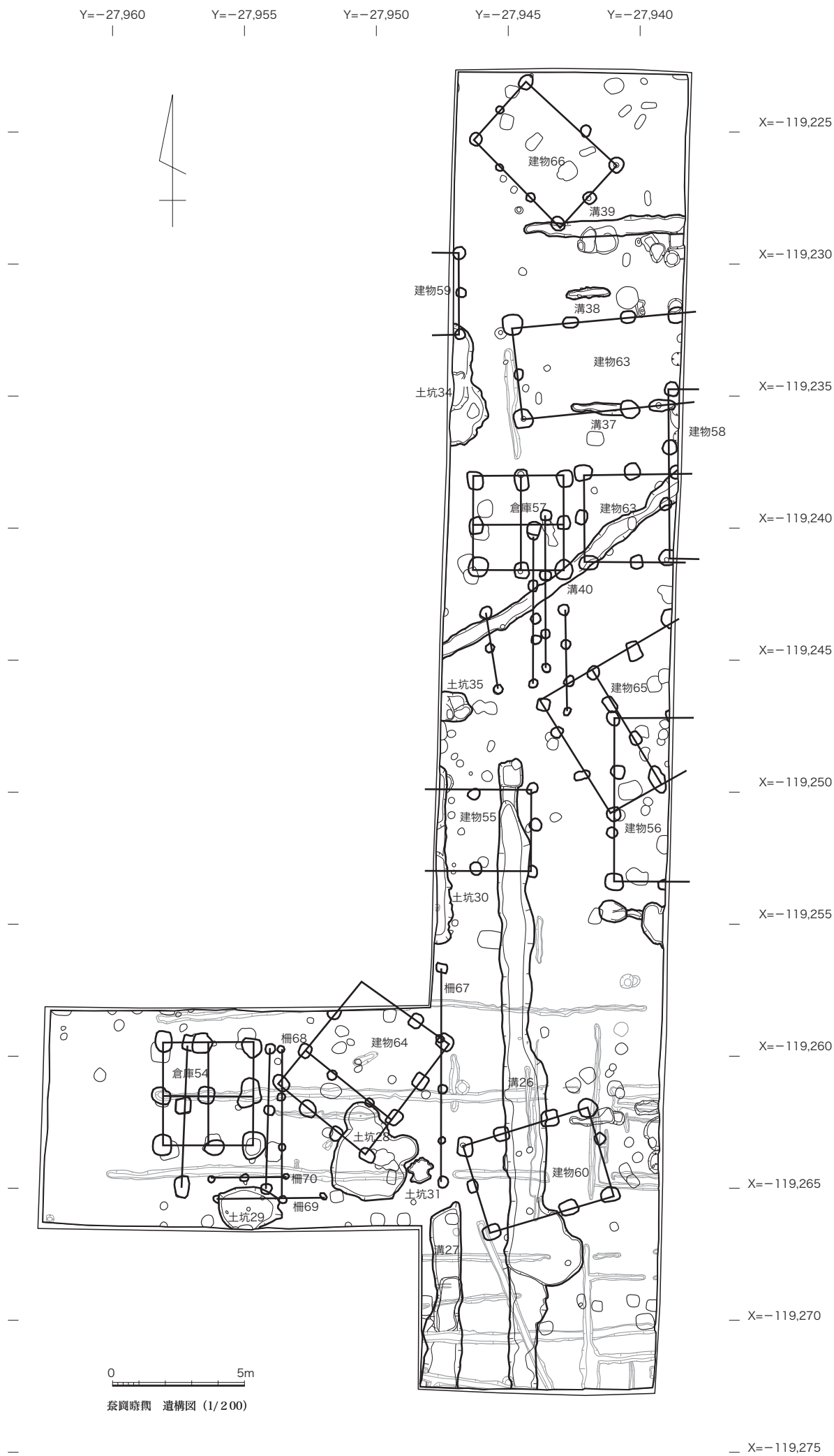
調査地の長岡京跡内での位置は右京五条三坊三町にあたります。東には西二坊大路、西に西三坊坊間東小路、南には五条条間南小路が通り、北に五条条間小路が想定されます。この町内は約 113 m 四方の広さが確認でき、今回の調査地は町内の南東部にあたります。

これまでの R620 次、R317 次調査地ではそれぞれ町内の中央部で細長い土坑状の溝が見つかり、町内を分割する区画施設であると考えられます。町内の土地区画については、延喜式に規定されている平安京の「四行八門制」が知られており、それにならって分割したものが 2 図です。

今回の調査区の長岡京期の遺構は数時期に渡っており、主に 4 図の二時期に大別されます。最も古い 1 期では「四行八門制」による分割ラインが溝 38、土坑 30 などと一致し、溝 26 が近い位



2 図 検出条坊を元に作成した町内遺構図



3図 検出遺構全体図（昨年未段階）

置にあたります。溝 26 の西には約 1.8 m から 2.4 m 離れて溝 27、土坑 30 が掘られており、また溝 39 と溝 38 が約 2 m の間隔で掘られており、これらの間が通路として機能していた可能性が考えられます。

このような遺構配置から、当町内においては平安京の四行八門制に近い町割りが施行されていたものと考えられ、町内ないし宅地内を通行するための通路がもうけられていたことが想定されます。

出土遺物

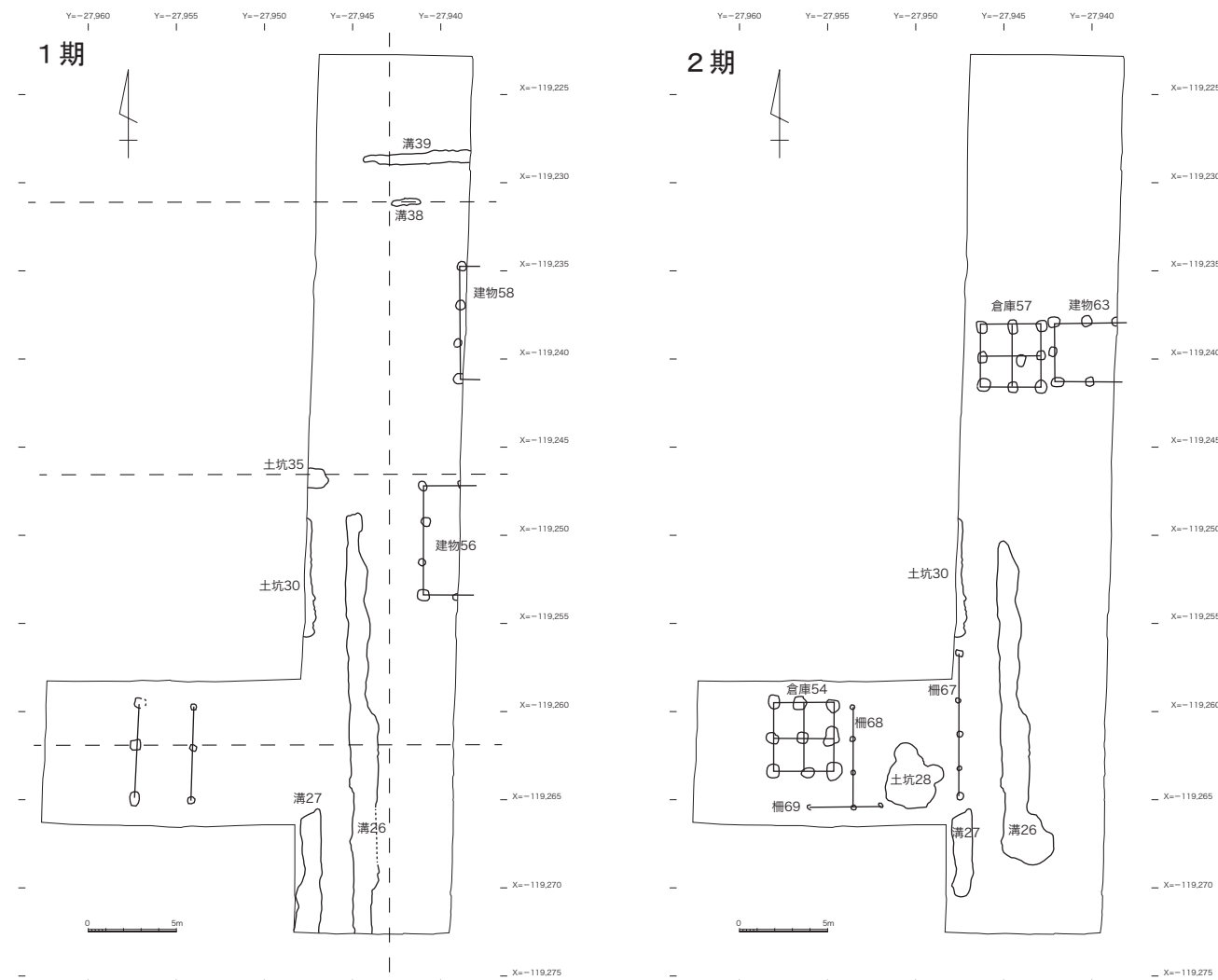
調査ではおもに溝 26 と溝 27 から大量の遺物が出土しています。埋土には炭や焼土が多く含まれ、鉄釘や炉壁片も出土していることから、近くに工房があったことがうかがえます。土器には土師器、須恵器、瓦片、円面硯、ほかに愛知県・猿投窯製の須恵器も出土しています。また「月」と書かれた墨書土器が数点出土しており、居住者に関する資料として注目されます。

土器の様相から、平安京遷都後も引き続き当地に居住していた可能性が考えられます。

まとめ

長岡京で町内の宅地割り（敷地境）に関する溝や柵列などの遺構はまだ少なく、そして分割の基準も一定していないようでよくわかっていません。そのような中で今回の検出例は貴重な例となりました。中でも町内に設けられた通路は、これまで一町域（左京二条三坊十五町）を有する貴族の宅地に設けられた門から続く通路や京内寺院（願岡廃寺）に関する通路など特殊な例を除いては確認されていません。

宅地内に公共の通路を設けると均等な宅地配分が崩れることなどを考慮すると、当地は少なくとも 1/4 町を占拠する宅地であったと考えられます。



4図 長岡京期の遺構配置図